

# 地域特産種増殖技術開発事業 亜熱帯磯根グループ (タカセガイ) 基礎調査・資源添加技術開発及び親貝仕立て試験 (要約)

久保 弘文・勝俣 亜生

## 基礎調査

### 1). 生態調査

- ・天然タカセガイ幼貝はリーフの沖側の高潮位部にまとまって観察された。全出現個体の平均殻径48mmであり、それらはすべて幼貝にあたる。
- ・親貝の生息地の藻類相はハイオウギが42%、コモンアミジが18%を占め、消化管内容物もコモンアミジが42%、ハイオウギが30%を占めた。成貝の生息場形成の1つにこれらの藻類相が深く関与していることが明かとなった。また、その量的関係では殻径8cm以上の成熟個体は8cm未満の未成熟個体の2.7倍に増大し、成熟と伴に飛躍的に摂餌量が増加する。
- ・卵径分布組成について、調査した。6, 7, 8月は成熟卵が95%以上を占め、特に6月はそのピークとなった。4, 5月は未熟な卵母細胞が見られ準備期、また10月は多くは成熟しているものの小型卵が見られたため終息期、冬季1, 2月は未成熟で休止期と系列化できた。

### 2). 漁業実態調査

- ・平均漁獲殻径は恩納村: 111.7mm (N=197)、伊平屋村107.7±11.8mm (N=90)であった。
- ・伊平屋・恩納の貝殻価格は過去最高の720円/kgを記録した。
- ・平成元年度の貝殻集荷量は恩納1718kg、伊平屋2391kgで前年と同様、低くなっている。
- ・月別身価格は恩納で平均4438円/kg、最高7200円/kgとなり、いずれも過去最高値を記録した。

### 3). 資源管理認識定着化指導

- ・最も高い密度は禁漁区すぐ南のE区が多くなった。禁漁区の貝がE区へ移動し、その南の水路に移動を阻まれて蓄積し、一見、資源量が多くなった。

## 親貝仕立て試験

- ・冬季に20.7℃から28.6℃で低密度での親貝仕立てを約3ヶ月行った。しかし産卵誘発試験を行ったが反応がなかった。

## 資源添加技術開発

### 1). 室内実験

- ・食害動物の捕食選択性はフトユビシャコが10mmサイズを強く選択し、1日に1尾の食べる捕食量は17mmに対する量の約1.5倍であった。

### 2). 追跡調査

- ・追跡調査方法の検討では死殻法は生残率推定手法として適さないことが判ったが、一定面積抽出法では詳細な底質と生残率の関係が把握され、また放流起点からの分散から手法の検証も行うこ

とが出来た。

- ・タカセガイに適した環境（好適な微生物地）は小さな範囲（面積）をユニットとして、砂の溜らない死エダサンゴ質に放流種苗が集中し、砂の溜る死エダサンゴ域では非常に少なくなった。現場ではその砂の中に死んだ種苗が埋まっている状態が多く観察された。放流区画で最も高い生残率はこうしたユニットが合致した環境で117日後43%と過去最高となった。